

上総南西部における古墳終末期の様相

小 沢 洋

はじめに

1. 小糸川流域

2. 小櫃川流域

小結

論文要旨

古墳時代の上総南西部には2つの強大な政治領域が存在していた。一つは小櫃川流域の馬来田国であり、もう一つは小糸川流域の須恵国である。この両地域では古墳時代のほとんどの期間を通じて継起的に大形古墳の築造が認められ、房総の諸首長層の中でも、とりわけ安定した勢力を維持していたことが窺われる。

小糸川流域では、前期の段階には中・下流域の丘陵上に前方後方墳が拠点的に存在する状況であるが、中期以降には下流沖積地の内裏塚古墳群を中心に首長墓群が形成される。5世紀中頃に房総最大の前方後円墳・内裏塚古墳が築かれて後、6世紀前半代など一時的に首長墓の存在が不明確な時期もあるが、6世紀後半期には継続的な100m級前方後円墳の築造が見られ、中小規模の前方後円墳・円墳を含めた首長系集団の墓域を形成する。7世紀代に入ると、割見塚古墳を始めとする幾つかの方墳が築造され首長系集団の墓制が一新される。これらの方墳は二重周堀・切石積石室といった強い共通性を有しており、房総諸地域の斎一的な終末期方墳形成の中での階層的な意味付けがあったと考えられる。

小櫃川流域では、前期の段階にすでに中流域の小櫃地区を本拠とする首長勢力があり、飯籠塚古墳・白山神社古墳といった大形前方後円墳が築かれている。しかし中期に入ると高柳銚子塚古墳を初現として下流沖積地の祇園・長須賀地区に一貫して首長墓群が形成されるようになり、以後は小糸川流域と非常によく似た展開をたどる。ただし小櫃川流域の首長墓の多くが今日では消滅しているため、編年的関係が不明な部分も多い。また6世紀末葉の金鈴塚古墳を最後に、小櫃川流域では終末期の首長系古墳（方墳）が確認されておらず、上総最古の寺院・大寺の出現と関連してその動向に大きな疑問が残されている。